

## フェミニズムと家族史

落合恵美子

本稿では、七〇年代の二つの女性史論争（村上信彦と水田珠枝をめぐる）以後今日までの日本の女性学と家族史との交流に焦点を当てる。この時期の大きなインパクトとなったのは、共に欧米の影響を強く受けたウーマンリブ運動と社会史の興隆であったので、欧米の動向にも適宜言及することにした。

ウーマンリブ運動に触発された欧米のフェミニスト歴史学の初期の業績は、論文集『Clit's Consciousness Raised』（1974）、『Signs』誌、Feminist Studies 誌の歴史系論文に代表される。当然「解放」への志向が強く、従来の歴史学の男性中心主義を鋭く批判した。性・身体や女性性の問題を正面から取り上げたリブ運動の精神を受け継ぎ、家族への関心は当初から高かった。これ以前の女性史が公的世界で活躍した女性に専ら目を向けていたのと比べると、女性史と家族史との対話はこの頃開始されたと言ってよからう。特にウィクトリア時代における女性の家庭役割の確立を論じたウェルターやスミス・ローゼンバークらの研究が名高い。意外に知られていないが、米国リブ運動の先鋭な指導者ファイアストーンの『性の弁証法』は、アリエスの『子供の誕生』に想を得ている。しかし女性史と家族史とは方法論や価値観をかなり異にしていたので、交流はそれほどスムーズではなかった（有賀）。

この最初の芽が成長したひとつの方向がマルクス主義フェミニズムである。日本にはまず水田の階級支配・性支配の二元図式として紹介され、第二次女性史論争を惹き起こした。性支配の主たる場である家族を各段階の資本主義社会の中に位置づける理論化を進めたことが、この派の業績である。ミッチェル、ザレツキ、ダラコスタ、クーンとウォルブ、ドゥーデンなどの代表的著作が次々と邦訳され、英国を中心とした家事労働論争も久場嬉子や竹中恵美子によって紹介された。そして『主婦論争を読む』『資本制と家事労働』などの上野千鶴子の活躍によって、この派の視角は日本においても広く市民権をかせげた。

社会史とフェミニズムの関係は複雑である。前述のように初期のフェミニスト歴史学もすでに社会史的視角をもっていたし、マルクス主義フェミニズムも家族の社会史的成果をおおいに参照している。しかしこれらは社会史としては、一部の民衆運動史とならんで価値観（「解放」への志向）が最も濃厚な部類に属し、そのために社会史としては歪んでいると批判されることも多い。反対にイリイチの『ジェンダー』に象徴されるような回顧趣味的で性差強調の社会史の傾向は、一般のフェミニストからは厳しく攻撃される。日本でも八五年に反イリイチ派による「エコロジカル・フェミニズム批判」が展開された。

社会史の立場をとる長谷川博子の解放史批判が、第三次女性史論争とも言われるほどの物議をかもしたのも、このような文脈による。長谷川は「従来の被抑圧者史観Ⅱ女性解放史観から脱皮し、女の歴史をよりリアルに捉えること」を主張し、女のみを比

重をかけるのではない「女・男・子供の関係史」としての家族史（家族の範囲を超えることも含む）を提唱した（拙稿も同じ方向を示したものである）。これに対し解放史系の女性史研究者は、水田も含めて激しい反発を示した。より一般的な社会史と唯物史観との対立も背景にある。

社会史的とは言わずとも、およそ「過去」という「異文化」を扱おうとするならば、フェミニズムなりマルクス主義なりに、歴史を外側から評価する特権的位置など与ええないのは当然である。それらは歴史現象であり、むしろ拙稿のように歴史的分析の対象であるからだ。長谷川の主張は大筋で正当だ。

しかしそのことは「従来の歴史学」の全否定にはつながらない。そもそも「女性」にも関心の深い家族の社会史研究者を連ねてみても、ルイズ・ティリー、デイビス、ドゥーデン、セガレーヌ、ヴェルディエ、デグラート、それぞれの作品には当然ながら「今を生きる者」としての各々の価値観がこめられている。枠組への妄執を取り払い、対立する立場の間の対話を求め、相互に成果を享受し合うことこそが、現在要請されている。

近年、日本でも一次史料に基いた欧米家族の社会史的研究が成果を生み始めている。女性史との関連では、フランスの出産をめぐる藤田苑子、長谷川博子の論考、女子労働と家庭役割の関係に注目した住沢とし子、中村伸子などが目をひく。

他方、日本史では、唯物史観を大枠では継承しつつも社会史的視角を柔軟に取り入れて定説を修正した『日本女性史』など、女性史総合研究会を中心とした仕事が続々とまとめられている。一

部にドグマを脱しきれぬ部分があるのは遺憾ながら、おおむね多い「対話」の好例である。

フェミニズムと家族史は対立と協働を繰り返しながら、結局、常識的な「家族」像を突き崩すことに共にあずかって力があつた。人類学や精神医学も同じ結論を支持しているし、何よりも現実の家族が急速に変貌を遂げつつある。家族定義の再考を中心とした家族社会学の再編成と並行して、家族史も各時代の人々の「家族」観のエスノメソドロジ的な描出に、これまで以上に心を砕いていくべきだろう。そしてさらに「家族」をほみ出して、家族と他の制度との関係や非家族的生活者などに目を向けていくことが必要なのではないだろうか。

#### 〈主要参考文献〉

有賀夏紀「アメリカ史における家族と女性の研究」、『家族史研究』四、一九八一。

落合恵美子「近代家族の誕生と終焉」、『現代思想』一三一六、一九八五。

「近代とフェミニズム」『講座女性学4女の目で見る』、一九八七、勁草書房。

長谷川博子「女・男・子供の関係史にむけて」『思想』七一九、一九八四。

水田珠枝『女性解放思想のあゆみ』、一九七三、岩波書店。

「女性解放の視点」『未来』（連載）、一九八〇。

〔同志社女子大学・家族社会学〕